
藤田と斉藤

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藤田と斉藤

【Nコード】

N2001H

【作者名】

るつね

【あらすじ】

土方の提案で、藤田五郎は斉藤一と組んで仕事をする事になった……。

「斉藤」は二人いた。

「君たち二人は、よく似ているな」

あれは土方の言葉だったか。

たしかに、藤田と斉藤はよく似ていた。顔立ち、背格好、声質。ぱつと見た感じでは、双子でもこうは似るまいというぐらい。違ったのは剣の腕と、纏まとった血臭だった。実を言えば、藤田には人を斬った経験すらなかった。対して、斉藤は新撰組三番隊長、その戦歴は推して知るべし、である。

「どうだ、これからは二人で組んで仕事をしてみちやあ」

土方がそう言ったのは、単なる思いつきだったろう。幸か不幸か、その言に反駁はんぱくする者が、その場にいなかった。当時の藤田は新米隊士であり、鬼の副長の言葉に反論するなど考えもつかなかったし、斉藤は どうでもいいようだった。

話ほとんどん拍子に進み、藤田と斉藤は組んで動くこととなった。不逞浪士ふていろうしの取り締まり、隊内の肅清。まずは藤田が前面に出て、相手の注意を引きつける。藤田に気を取られている相手を、斉藤が奇襲で討ち取る。これが、嵌はまった。連敵連殺。まさしく無敵、であった。

とはいえ、時代の趨勢すうせいは幕府、ひいては新撰組には厳しいものになっていった。鳥羽伏見の戦いの敗北以後、幕府軍は連戦連敗。新撰組もまた。永倉、原田といった生え抜きの隊士たいしが袂たもとを別ち、近藤は流山で新政府軍に投降、斬首された。その後、新撰組の残党、残党というまでに数を減らした集団は北へ北へ。

藤田は、会津で脱落した。会津は彼の故郷であった。不思議だったのは、斉藤が藤田とともに会津に残ったことである。情か情性か。

ともかく、藤田にとっては僥倖じやうひんだったと言えよう。彼一人では、会津での戦いに生き残れはしなかっただろうから。

慶応四年（西暦一八六八年）会津藩は降伏。数日後、藤田も投降した。この時、捕虜の中に斉藤の姿はなかった。

藤田が釈放され、時尾という娘と結婚してからも、斉藤は姿を現さなかった。心配はしていなかった。生きている。その点について、藤田は確信していた。なぜ、と問われても、説明はできない。ただ、分かったとしか言いようがなかった。

斉藤が、再び姿を見せたのは、藤田が東京に移住し、警視官（当時の警察官）となつてからだ。刺客に襲われたのだ。新撰組が京で肅清の嵐を巻き起こしていた頃から、十年も経っていない。藤田、いや「斉藤」に恨みを持つ者がいてもおかしくはなかった。刺客は複数で、二、三合打ち合ったものの、それで追い詰められた死を覚悟したその時、飛び込んできた影があつた。刺客たちを斬り伏せていく、その姿は肉眼では捉えきれなかったが、藤田は斉藤であると確信していた。

果たして、それは斉藤であつた。

「久方振りだな」

そう声をかけると、斉藤は小さくうなずいた。その目が、京の、会津の、戦いの渦中にいた頃と同じ色をしている。この男は、戦争が終わつてから今まで、どんな生活を送っていたのだろう。そんな疑問が湧く。どうあれ、斬っていたのだろう、人を。

「すまない、助かった」

また、小さくうなずく。何だか、藤田は悲しくなつた。

それから、また二人の奇妙な連帯生活が始まつた。斉藤は藤田を護衛するように、影となり付いてくる。代わりというわけではないが、藤田は自宅の離れを、斉藤の住居として貸し与えた。度々、夕食にも招いたりもした。

「いつも主人を護ってください、ありがとうございます」
そう時尾に頭を下げられた時の斉藤の顔こそ見ものだった。幾多の白刃の中に身を晒して平然としていた剣の達人が、困惑していた彼には、別段特別なことをしている、というつもりはなかったのだろ。う。らしい、と言えば、らしかった。

西南戦争が起こったのは、明治十年二月のことである。

西南戦争に、藤田は豊後口警視徴募隊の抜刀隊として参加することになった。警視官が兵隊として徴用されたことから分かる通り、まだ当時の警視官は軍人的性格を色濃く残したものであった。

藤田は五月に戦線に投入された。秘密裏に、斉藤も同行している。ここで、藤田は目覚ましい功績を立てた。作戦は、新撰組の頃と同じ。藤田ができるだけ目立つように兵を動かし、それに気を取られている敵軍の背後から、斉藤が急襲。混乱した敵軍に、藤田が兵を率いて突貫をかける。これで、ほとんど勝負は決まった。大砲二門を奪取するなど、その武功は、当時の新聞に掲載されるほどだった。

このからくりは、薩軍（反乱軍）の中で、ただ一人気付いた者がいた。桐野利秋である。かつての名を中村半次郎といい、人斬り半次郎として恐れられた傑物。あの近藤勇をして、「薩摩の中村半次郎だけは相手にするな」と言わしめたほどだ。

彼が、気付いた。藤田五郎ではない、もう一人の斉藤一が存在にそれは、同じ人斬りとしての勘だったろうか。

桐野は西郷に、この事を進言した。西郷は一言。

「おはんに任せます」

その日から、桐野は姿を消した。

それから数日後。

朝から、藤田は何とはなしに嫌な気分であった。

どうにも、あの靴というやつは履き慣れなくていけない。

右足に二箇所、左足に一箇所できた靴擦れを気にしながら、厠に向かう。途中、小石が積まれていた。用を足した後、藤田は部屋には戻らず、近くの森の中へ入っていった。斉藤がいる。営所で顔を合わせるわけにはいけないので、斉藤から藤田に話がある時は、このようにして連絡をつけるようにしていた。

「嫌な予感がする」

君も靴擦れかい。

そう軽口を叩こうとして、斉藤の真剣な顔に圧される。

「何がだい」

「分からん。分からんが、こういう時は必ず何かが起こってきた」

斉藤は、焦りとも苛立ちともつかぬ表情で、

「もし、もしもだ。俺に何か起こったら、逃げてくれ。くれぐれも、助けようなんて思うな。俺一人ならばどうとでもなる」

「……分かった」

藤田は、そう嘘をついた。

気のせいかな。

戦いが始まって、一時間。いつも通り、藤田が敵軍の注意を引きつけている。斉藤がいる位置が死角になるように、巧みに兵を動かしていた。いつもながら、藤田の用兵の妙に、斉藤は舌を巻いた。一軍の指揮官として見た時に、斉藤は遠く藤田に及ばない。これまで自分が生き残れたのは、己の剣技ではなく、藤田の用兵のおかげだ。掛け値なしに、そう思う。

そろそろ、動くか。

嫌な予感はまだ消えていないが、ここまで何もなかったのだ。杞憂だったのだろう。

斉藤は立ち上がろうと、腰を浮かせる。

その背後から、桐野が斉藤に斬りつけた。

不様に、地面を転がる。

斬られたのは左腕。深くはない。が、浅くもなかった。剣は満足に振るえまい。ゆえに、致命傷。

桐野の表情に、驚きが浮いている。一太刀で仕留めるつもりだったのだろう。だが、右手一本で刀を構える斉藤の姿を見て傷の程度を察したのか、表情に余裕が戻った。ゆっくりと刀を構え直す。示現流蜻蛉とんぼの構え。

「斉藤一、でござすな」

斉藤は答えない。もとより、返答は期待していなかったのだろう。桐野の姿が、殺気に膨らんだ。

「お命、頂戴しもんで」

示現流、必殺の初太刀が繰り出される。

そこに飛び込んできた。

藤田五郎。

血飛沫しぶきがあがる。藤田と桐野、双方がどう、と地面に倒れ伏した。桐野の刀は藤田の右肩から袈裟懸けに心の臓のあたりまで斬り下げられており、代わりに桐野の首が藤田の肩越しに振るわれた斉藤の刀によって、胴から斬り飛ばされていた。

「藤田！」

桐野の死体には目もくれず、斉藤は身体を張って自分を護つてくれた戦友ともの名を呼んだ。

「藤田、藤田！ 目を開ける！」

「難しい……注文をするな」

うつすらと藤田は眼を開ける。

「藤田！」

「斉藤……」

藤田は、弱々しい、だが穏やかな声音で、

「時尾と、子供たちを頼む」

「嫌だ！」

齊藤は叫ぶ。

「なぜ、お前が、お前みたいな奴が死ぬ。死ぬなら、俺の方だろう！」

「違う」

藤田はゆるゆると首を振る。

「死に理由なんかない。いつでも死は唐突に訪れる。だから、俺たちは懸命に日々を生きるんだ。死の瞬間、後悔しないように。俺に後悔はない。妻を娶^{めと}り子を成し……何より、後事を託^{たく}せる親友^{とも}がいる」

藤田は、ふう、と大きく息をつき、

「頼むぞ」

そう言つて、息を引き取つた。

齊藤一　藤田五郎は大正の御世まで生きた。床の間に座つたま
まの大往生だつたという。辞世の句は伝わっていない。享年、七十
二。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2001h/>

藤田と斉藤

2010年10月8日15時17分発行